

た)。

観測海域内で、最も地震活動度が高かったのは、伊東沖から伊豆大島北方沖にかけてである。ところで、相模トラフの軸の向きは、伊豆大島の北側で南北から東南東 — 西南西に変化している。このトラフ軸の変曲点付近で、観測期間中に約10個の浅発地震が発生した。

これらの地震が、伊豆大島北側で曲がっている相模トラフ軸周辺での、複雑な変形テクトニクスを反映したものと考えられる。

ワシントン大学滞在記 — 米国北西部の地震予知研究

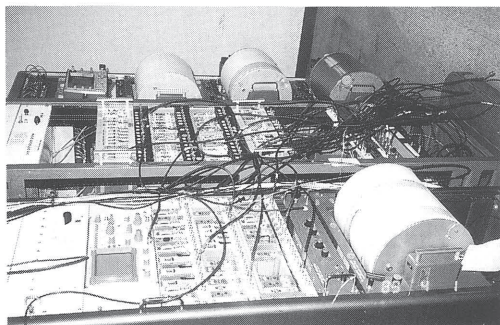
第2研究部 鷗川 元雄

米国での地震予知というと、サンアンドレアス断層に沿うカリフォルニアを思い浮べるが、その北米北西部からカナダ西部を含むカスケード地域でも、近年地震（予知）が大きな問題となっている。

筆者は、昨年9月から長期在外研究員として、ワシントン州シアトルにあるワシントン大学に滞在しているので、カスケード地域での地震（予知）について紹介したい。

カスケード地域では、記録のある歴史時代がたかだか200年ということもあり、大地震の記録は残っていない。それにもかかわらず、大地震発生が懸念されているのは、次のような事情による。

1980年代初めまでにプレートテクトニクス論に



ワシントン大学の地震記録収集装置の一部。ワシントン大学では約120箇所の地震観測点を維持している。

より、カスケード地域の下にファン・デ・フカプレートという海洋プレートが、年間数cmの割合で沈み込んでいることが明らかにされ、また主として、ワシントン大学により整備された地震観測網（写真）により、沈み込んだプレート内で発生している地殻下地震の帯状の分布が示されて、ファン・デ・フカプレートの沈み込みが確信されるようになった。

この段階では、プレートが地震を起こさず、するすると沈み込んでいる可能性もあった。しかし、1986年に米国地質調査所のB.アットウォーター氏が、海岸沿いの地層に急激な沈降の繰り返しを示す、ピート層を含む互層を発見し、大地震の発生する場所である可能性が、一気に高まった。

歴史が大地震の繰り返しを示す我が国と異なり、大地震発生の可能性があるかどうかを、地質学的に検証しなければならない難しさがあるが、現在、地震観測、測地測量など様々な角度から、予測される地震について、盛んに議論されているところである。

UJNR耐風耐震構造専門部会開催

第21回目を迎えた表記の会議が、5月14日から27日の間、茨城県つくば市を中心に行われる。またこれに先立ち、5月9日から12日の間に、同部会のワークショップが開催される。

今回の会議は、耐風、耐震、津波・高潮の3部門について、日米両国から研究報告が行われる。当センターからは、大谷耐震工学研究室長が「日本における強震観測の歴史と現状」について発表する。また、19日にはアルメニア地震の調査報告が日米両国から発表される。

都市地盤データベースの開発による震害予測手法の開発 — 科学技術庁長官賞 —

幾志新吉第4研究部情報処理研究室長は、地震時における都市地盤の振動特性及び地盤の液状化等の地盤災害の発生危険度を地域的に把握するた